ロッツェの時代

朝永三十郎

此一篇は去る五月二十日に開かれた京都哲學會春期公開講演會で述べた講演の其儘の筆錄である。既に公にされた單行本「ロッツェ」中に於ける論文の一節と多少重複する節もあるが、一は其れの通俗的敷衍又は追補といふ意味を以て、一は等しくロッツェ記念の一部として此講演會で述べらるべき豫定であつて已むを得ざる事故で果されなかつた、本號掲載の錦田文學士の「ロッツェの妥當に就て」と相俟つて吾々のロッツェ記念會の報告であるといふ意味を以て、之を本號に掲載することゝした。

一

哲學者ヘルマン・ロッツェが生れたのは一八一七年五月廿一日であつて、本年が其一百年目、而かも明日が丁度其誕生日に相當する。ロッツェの思想史上に於ける位置及び意義に就ては人に依て色々見るところを異にして居ると思ふが、私共は大體下の樣に考へてよい思ふ。ロッツェはカントの樣な、哲學上の根本的革命を仕遂げ思想史上の一大轉廻點となつたといふほど大なる獨創的の思想家ではない。又たヘーゲ

ルの樣な、神秘的の深味と、嚴密で細緻な概念的勞作とを兼ね有する上に、一つの大きな哲學運動の總〆めをして其以前及び同時の種々の哲學思想をば自己藥籠中の物として一大體系を組織したといふ樣な哲學者でもない。即ち大なる創始者でもなければ、大なる大成者でもない。併し彼れは一の中興者として極めて重要な意義を有する思想家である。前世紀中葉以後の哲學衰頽期に於て哲學の爲めに苦節を守つて先行哲學者の思想を承けて後の哲學復興期を喚起することに寄與した注意すべき若干の思想家があるが、ロッツェは其中の一人であつて、而かも其最偉大なるものであるといふことは否定出來ないと思ふ。第十八世紀八十年代より第十九世紀三十年代までの間は獨逸哲學、否な一般に近世哲學の全盛期であつたが、前世紀四十年代以後は又近世に於ける哲學の最衰頽期であつて、而して世紀の變り目頃よりして復た哲學が徐々復活し始めて居ると言はれて居るのである。「哲學の復活」Wiedergeburt der Philosophie といふ語は一九〇七年伯林大學のカール・ストゥムプが其總長就職講演で之を標題として以來專ら學海の通語となつて居るが、併し事柄其者は大體前世紀の終末からのことであると見てよいと思ふ。而してロッツェの活動期は前世紀の四十年代から八十年までであつて、丁度此哲學の最衰頽期と一致して居る。而して彼は

此間に於て全盛期の獨逸の哲學運動、卽ち所謂「獨逸運動」(註)deutsche Bewegung と現代の新哲學運動との間の橋梁となり、前を承けて後を起すといふ點に於て重要な意味を有つて居る思想家である。現に獨逸に於ても現代の新理想主義、論理主義などの勃興に連れてロッツェの重要な意義が漸次認められて來て、近來「ロッツェ・ルネッサンス」の語さへ專問雜誌上に現はるゝ樣になつて居る。此點に於て「哲學の復活」期と呼ばれて居る現代の吾々は常に大なる感謝の念を以て彼れを記憶せねばなるまい。其れで、吾々は彼れが哲學史上に於て有する意義に對して丁度適當と思ふ程度に於て、卽ち此講演會の三分の二を割いてロッツェに獻げて(不幸にして他のロッツェに關する講演者たる錦田文學士が已むを得ざる故障の爲めに缺講となつたので二分の一となつてしまつたことは遺憾であるが)一方に於ては一般的に哲學に對する其苦節に對して感謝の意を表すると共に、他方に於ては更に其思想の內容に立入つて、其中に於て現代哲學に對して重要な意義を有つて居るものは如何なるものであるかといふことを考査して見たい。

併し私共は旣に此記念の爲めに丁度明日の記念日を以てロッツェに關する同人合作の一つの單行本を公にせんとして居る。其れは同人銘々の關心又は興味を中心

としてロッツェの思想の種々の方面を擔當して叙述又は論評したものであるから、之に依て其思想の重要な方面、例へば形而上學、心理學、倫理學、社會學、美學といふ樣な方面は一通り吾邦の讀書社會に紹介されることゝ思ふ。で、此處では私は「ロッツェの時代」といふ題で、此單行本中の私の論文の一節をば斯の如き公開講演に適する樣に多少敷衍し、通俗化し、具體化して、御話をして、哲學史上に於けるロッツェの位置の一端を示すと共に其節の追補としやうと思ふ。

（註）「獨逸唯心論」又は「唯心論諸體系」といふ概念よりもに廣汎な、卽ちカント及びヤコービからヘーゲル及びヘルバルトに至るまでの凡の哲學的勞作を含む。ノール(Nohl)の用語に随ふ。

二

ロッツェは前に述べにやうに一八一七年に生れて居る。一八一七年と言へばナポレオンに對する解放戰役が終局を告げた直ぐ後で、其れより暫くの間、卽ち一八三〇年頃までの間は獨逸は國民的精神が盛に勃興して其將來に對する陽々たる希望に充つて居つた時期であり、而して之と並行して唯心論的、理想主義的の哲學、殊に其發展の頂點と見らるべきヘーゲル哲學が全盛を極めて居た時期である。此間ロッツェは「ギムナジウム」を經て醫學の學生としてライプツィッヒ大學に學び、一八三八年に醫

學幷に哲學の「ドクトル」の學位を得た。て、大體獨逸の國民的精神勃興期及び唯心論及理想主義哲學全盛期とロッツェの幼年期及び修業期とは一致すると言へる。

次で一八四〇年代より一八七〇年までは知らるゝ樣に獨逸の國民的生活が最低潮に沈んだ時期であつて、而して此間はロッツェが思想家として活動した時期の大部分と一致する。　即ちロッツェは「ドクトル」の學位を取つた翌年(一八三五年)ライプツィッヒ大學の醫學の私講師となり、其翌年又た哲學の私講師となり、一八四一年には哲學上の處女作「形而上學」Metaphysik を、一八四三年には「論理學」Logik を(晩年の同名の著書と區別する爲めに「小形而上學」及び「小論理學」と呼ばれて居る)公にし、一八四四年にはヘルバルトの後を承けてゴェッティンゲン大學の哲學教授となつて、以後一八八一年まで引續いて此處の講壇に立ち、且つ重要な著述を公にして居る。　其重な著述を擧ぐれば、第一に「機械的自然科學としての一般病理學及び治療法」Allgemeine Pathologie und Therapie als mechanische Naturwissenschaft, 1842 普通略して「一般病理學」Allgemeine Pathologie と呼ばれて居る)「一般肉體生活生理學」Allgemeine Physiologie des körperlichen Lebens, 1851(略稱「一般生理學」Allgemeine Physiologie)「醫學的心理學又は心意の生理學」Medizinische Psychologie, oder Physiologie der Seele, 1852. 此三書はロッツェの書翰によれば密接に關聯し

て相待つて一の全體の一部を成すものであつて、尙ほロッツェは之に附加へて「人性學」Anthropologie を著はして其全體を完成したいといふ目論見を立てゝ居つたが、此「人性學」著作の計畫は段々と規模が大きくなつて、大著「ミクロコスムス」三卷 Mikrokosmus, 1856—64 の著作となつた。此著述は其研究問題の範圍が非常に廣汎なものであつて、ロッツェが興味を有つて居つた殆んど凡ての問題、生理、心理、歷史哲學、認識論、倫理學、社會學、美學、形而上學、宗敎哲學等に亙つて居つて、最初の「人性學」といふ標題は僅かに此「ミクロコスムス」の副名の一部となつて—「人性學の試み」Versuch einer Anthropologie の語中に—此書の成立の歷史を示して居る。是等の著述の中「一般生理學」の出でたのはかの獨逸國民的生活沈衰の最顯著な目標となつて居るフランクフールトの國民議會の三年後であるが、高蹈的で退嬰的な學究一遍のロッツェも流石此頃の書翰には時事日に非どいふ樣な歎聲を屢々漏らして、國民生活の沈衰と共に大學も亦た日に不振を極むるといふ樣なことを悲んで居る。此頃ロッツェは丁度其「人性學」の腹案中であつたが、其最中恰かも三番目の男兒が出生したといふ騷ぎの爲めに(一八五三年)、休暇になつてもゴェッティンゲンを離れることが出來ない(ロッツェは健康上非常に纖弱な資質であつたので休暇には殆んど缺かさず保養旅行をする習慣であつた)ので友人ヒル

ツェル(註)への手紙に、此際大仕掛の旅行でもして―望むらくば以太利へ―氣を晴らしたいといふ憬がれを漏した末、「若しこれが實行出來たならば『人性學』に取て大なる利益であらう。若し私が吾々の周圍にあるよりは更に清新な生々した國民に接したならば慥かに人類をば更に愛すべきものに描くであらう」と述べて居る。即ちロッツェは當時の獨逸の現狀に失望し將來を悲觀して遙かに以太利の天地を望んで之を羨んで居たのである。

「ミクロコスムス」完成後間もなく「獨逸美學史」Geschichte der Aesthetik in Deutschland の著作に著手して一八六八年に之を完成出版した。次でヒルツェルの勸誘を受けて初期の「論理學」の追完改版を思立つたが、此計畫が又た段々と大きくなつて、「論理學」、「形而上學」及び「實踐哲學」(倫理學、美學、宗敎哲學を含む)の三部又は三篇より成る、自己の哲學體系の最後の新論述を試みやうといふ計畫が成立つた。其れはヒルツェルへの書翰によれば一八七一年であるが、此年は恰かも普佛戰爭の結果ヰルヘルム第一世がヱルサイユ宮に於て獨逸皇帝の尊號を受けたことに依つて獨逸統一の宿望が初めて實現せられ、今日の獨逸の强盛の端が開かれた年であることは周知の事實である。此「體系」中第一篇「論理學」は一八七四年に、第二篇「形而上學」は一八七九年に、而して第三

篇の「實踐哲學」は著手すらされない中にロッツェは伯林大學へ轉任の翌年即ち一八八二年世を辭した。

（註）ヒルツェルはライプツイッヒの出版書肆の主人で文藝及び哲學上相應の趣味と造詣とがあり、殊にゴエーテ研究を以て有名な人である。ロッツェとは極めて親密な交友でロッツェの著述の殆んど凡てが其書肆で出版されて居るのみならず、ロッツェ一身上の重要問題、例へば轉任問題の樣なことに關しまでも常に缺くべからざる相談相手となつて居る。

三

偖て、此ロッツェの活動期の大部分、而して獨逸國民生活の沈衰期は同時に又哲學輕視の時期であつた。此哲學輕視の風潮は、第一に消極的には世紀初め全盛期の哲學其者の一般傾向に對する反動として、第二に積極的には當時の自然科學の狀態の結果として說明されることが出來、而して第三には今述べた獨逸國民生活の沈衰と密接な關係を有して居ると思はれるのであるが、併し今は此問題に立ち入る必要はない。此處では唯、吾々のロッツェは此間一般に大學に於ける學問の研究が衰へ、殊に哲學が輕視せられて居つた裡に立つて、常に大學の不振を慨し、學生の研究心、殊に哲學に對する眞面目なる關心を缺いで居ることを歎きながら、約四十年間一日の如く哲

學に對して苦節を守つて居つたといふことを見れば足りるのである。

先づ第一にロッツェの聽講生の數を見るに、ファルケンベルヒの記すところに依れば(Lotze, I,S. 17)最初の間は少數であつたが、一八六〇年頃から漸次增加したとある。然らば其增加したと言はれて居る時期に於ける聽講者の數はどれ位であつたかといふに、今試みにロッツェの最圓熟期とも言はるべき時期の一部分、卽ち其「體系」の勞作中の一八七五年から七六年までに於けるロッツェの聽講者の數を見るに、大學事務所の帳簿に就て見れば、宗敎哲學の講義に二十八人、形而上學の講義に二十二人、論理學の講義に二十七人とある。併し當時丁度ロッツェの講義を聽いて居つたファルケンベルヒに依れば、此外に尙ほ正式の申込がなくして講義を聽いた學生があるので實際の聽講生は之よりは稍多かつた、ファルケンベルヒは其記憶をたどつて、宗敎哲學に四十人餘、形而上學に約三十五人、論理學に六十人餘あつたと記して居る。之をば今日大抵同格と思はるゝ獨逸の大學に於ける有名な哲學敎授の聽講者に比すれば甚だしい逕庭があると思ふ。唯心理學のみは、帳簿面には四十七人と記されてあり、而してファルケンベルヒの記憶によれば少くとも最初の數週間だけは百人位はあつたといふが、これは當時の哲學的關心が如何なる處にあつたかといふことを示す事實と

して面白いことゝ思ふが、併し此事に就ては尙ほ後に述べやうと思ふ。

ゴェッティンゲン大學は一八三〇年代までは獨逸諸大學中最盛なものゝ一であつた。一八三七年に此處の七教授が時の君王の憲法違反に抗議して免官されたことは所謂「ゴェッティンゲン七教授免官」として有名な出來事であるが、是等の教授は當時獨逸に於ける一粒選りの學者であつて、此頃の此大學は活動盛りの多くの第一流の學者を網羅して實に元氣潑溂たるものであつた。而して哲學に於ては當時恰かもヘルバルトが、伯林を中心としたヘーゲル一派と相對して此處に覇を一方に唱へて居つた（七教授事件の際にはヘルバルトは哲學部の學長であつて、彼等と行動を共にせずして留任したので同僚及學生よりして彼れ是れの非難は受けたが、併し其れが爲めに、講壇の人としての彼れの聲望は少しも衰へては居ない）。其後ロッツェがヘルバルトの講座を繼いでからも、此の大學は以前程の潑溂の元氣はなくなつて居たけれども尙ほ獨逸で指折りの大學に數へられて居た。而してロッツェの造詣は其「ミクロコスム」の著作以前に已に一部の人々に認められて、一八五四年に既に伯林大學に之を招聘しやうといふことが議に上つたほどであり、殊に「ミクロコスムス」の出版後は益其眞價が學海に認められて、ベルリン、ライプツィッヒ、ボン等から招聘の相談を受け、當時相

1053

當の知名の哲學者であつたストリュムペルの如きは現にライプツィッヒ大學に於てロッツェの哲學を講ずるといふほどにもなつて居たのであるが、此上格の大學に於ける此聲名あるロッツェの講義をば當時聽いた學生の數は實に斯の如きものであつたのである。

當時の哲學不振の風潮を慨した文句はロッツェの書翰中處々に散見して居るが、中に就て一八六三年再度目に伯林大學よりの招聘を受けた際のヒルツェルへの相談の手紙が其のよい一實例であると思ふ。即ち其の中に下の樣な意味の文句がある。自分はゴェッティンゲンに就ては大した不平もない。尤も此處では道樂に哲學をかぢる者の外はない。併しベルリンはさうではないと思ふのも恐く美しい幻想に過ぎまい。彼地にはトレンデレンブルヒが充分な素養と立派な教授上の技能とを有つて三十年間一日の如く哲學を講じて居る、而して一人の競爭者も有つて居ない、而かも自分は彼か自分以上に成效して居るとも思へない、云々。更に當時に於ける哲學輕視の一實例は、ファルケンベルヒが一八七四年即ちゴェッティゲンに來てロッツェに就く前年にエルランゲン大學に這入らうとして宣誓式に出席して宣誓簿に「哲學々生」と書き入れた時に、時の總長であつた化學者ゴールップ・ベザネッツが今時哲學を專門とし

て研究する者のあることを不審にして、本當か、哲學の學生として這入るのか、哲學は遠くの昔死んでしまつてるではないか、と不機嫌な顏をして驚き叫んだ、と自ら記して居る。無論凡て、或は多數の大學が斯うであつたとは言ふことは出來ないであらうが、併し稀にも斯の如き例のあるといふことでも既に當時の一般傾向を察するに充分であると思ふ。

四

以上は唯一般的にロッツェの時代が哲學輕視の時代であつたといふこととの具體的例證であるが、次に尙ほ少しく其內容に立入つて、當時如何なる哲學說が專ら行はれて居つたかを觀て見たいと思ふ。當時の獨逸に於ては多少相前後して、併し一部相並行して三つの有力な思潮があつた。其の第一は唯物論、第二は形而上學派、第三は新カント派である。

此中最早く現はれ且つ最廣く一般公衆の間に勢力を得たのは唯物論であつた。併し唯物論にも種々の形があるが、最早く現はれたのはヘーゲル學派から出でた者であつた。此一派が最初說いた唯物論は宗教觀上の唯物論であつた。即ち宗教上

の種々の觀念や、信仰や、宗儀や、聖禮をば人間の物質的欲望の自然的産物であると見たのであつて、此傾向はヘーゲル左黨の祖であるストラウスに端を開きフォイエルバッハに至つて發展の極に達した。フォイエルバッハに依れば、吾々の宗教上の諸觀念は自己の價値の觀念の客觀化である。人間が自己の希願、自己の欲望を投射して之を人格化したものが其神である。此世に於ける麗はしき花卉を選み出して之を移し植えた空想上の花園が天國である。人間の希求、人間の理想慾は無限である、而かも之を充たす爲めの吾々の能力や方便は有限である。斯くて人は自己があらんと欲してあり能はざるものを實體化して神として崇拜し、有せんと欲して有し能はざるものゝ完備した世界を空想して之に住せんことを希求する。其故に、其國、其時代の人に取つて最高の價値を有するものが最神的の性質である。神が人格を有するといふは人格的生活が吾々に取て最高の價値を有するが故である。神は愛であるといふは愛が吾々の生存に取て最有用の德であることを意味する。基督教に於て神が人の爲めに斃んだといふのは犧牲が吾々の生活上最尊とき行であるといふことを示す。洗禮に水を用ゐ、聖晩餐式に麪包を割くは水と麪包とが人生に缺くべからざるもの、從つて最神的な者であるといふ意である。斯くて宗教は人間の自己投射、自己

神化であつて、從つて神學は人性學である。

尚ほ又ヘーゲル派からしてフェルディナンド・ラサール、カール・マルクス等の唯物論的史觀が出でた。即ち人類の社會的、政治的、精神的發展は全然其經濟狀態、即ち物質的の生産力及び生産の仕方の變化に依存する、人間が自然に加工する力と方法とが、一切の文明の土臺であつて、之に應じて法律及政治上の建物が成立ち、而して之に應じて又た道德、宗敎、藝術、哲學等の人文にも變遷や發達がある、といふのである。

是等はヘーゲル派から出た所謂唯物論であるが、併し其れは唯宗敎觀、道德觀、社會觀、歷史觀上に止まつて居つて、未だ形而上學的ではない、即ち方有を構成する根本實在が物質であるといふ樣な實在觀には立入つて居ない。斯の如き形而上學上の唯物觀は直接にヘーゲル派から出でずして自然科學者の間に起つた。其著名な代表者はカール・フォーグド、モレショット、ビュヒネル、ハインリッヒ・クツォルベ等であつて、其思想は一切の現象を、從つて意識作用までも物質の運動若くば其結果と見る、極めて露骨な、粗笨な形而上學的唯物論であつた。此唯物論的思潮の目標として最都合のよい出來事は一八五四年、即ちロッツェの「ミクロコスムス」第一卷の出でる二年前にロッツェの任地ゴェッディンゲンで開かれた自然科學者の大會である。此會の席上でロッツェの同僚

で生理學の教授たるルードルフ・ヴグネルは「人間の創造及び靈魂實體に就て」Über Menschenschöpfung und Seelensubstanz, 1854といふ論文を讀んでフォーグトの唯物論に對して基督教の信仰を辨護し、人類が一對の男女を祖先とすること、肉體作用より獨立な靈魂實體の存在するといふことを否定すべき生理學上の理由はないといふことを主張した。ヴグネルに依れば、靈魂は精氣(エーテル)的の實體であつて、而して恰かも音樂家がピヤノの絃を動かす樣に腦髓纖維を動かす、而して分裂して兩親より子孫に傳はる、これは科學的に證明の出來ることではないが、併し科學的に否定することも出來ない。吾々は知と信との圈域を嚴密に區別しなければならぬ。靈魂問題の樣な精密科學の力で解決することの出來ないことに關しては吾々は盲信 Köhlerglaube にたよる外はない。而して前に述べた樣な靈魂觀は吾々は聖書の教に依て之を信ぜざるを得ないといふのである。斯の如くしてヴグネルは自然科學の講壇をば基督教の辯護に利用したのであるが、之が爲めに此大會の席上で非常に議論が沸騰した。當の敵たるカール・フォーグトは之に對して「盲信と科學」Köhlerglaube und Wissenschaft といふ論文を以て之に答へ、其れには激烈な人身攻擊までも交つて居る。此論文の中に、當時の唯物論の主張の要點をよく示すとして屢引用せらるゝ「膽汁が肝臟の分泌なるが

如く、尿か腎臟の分泌なるが如く、思想は腦髓の分泌である」といふ意味の文句がある。モレショットも亦たフォーグトに應援して著書に依て極端なる唯物論を說き、宇宙間の萬象は悉く物質及び運動の兩者を以て說明され得ねばならぬと說いた。ビュヒネルの主著「力と物質」は同樣のことを說いた書として最有名な、最多く讀まれたものである。

蓋し、若し少しく綿密な哲學的眼光を以て見れば此論爭は双方共に極めて粗笨な議論である。ロッツェは此双方に對して如何なる態度を取つたかといふに、一方に於てヷグネルは其私交上の友で且つ先輩であつて初めロッツェがゴェッティンゲンに招聘せらるゝに就てはヷグネルの力が大に與つて居るのであり、ロッツェは其著「一般生理學」を彼れに獻げたほどであり、露骨な唯物論に對して宗敎的信仰を救護せんとする彼れの精神には充分同情したのであるが併し其粗笨な知信分離論には賛成することが出來なかつた、兩者の融合といふことは人間精神の本質的要求であつて哲學は此要求に應ずるといふことを以て其重要な職分として居るといふことを說いて居る。他方唯物論者に對しては、彼等が主張する徹底した機械的自然觀には賛同しながら、思想對腦髓の關係をば膽汁對肝臟の關係と同視したりする樣な粗笨な類推に

は無論賛同することは出來ない。併し是等は唯此前後の彼れの著書に依て之を知り得るのであつて、かの自然科學者大會の苦々しい論爭に就ては彼れは全然高見の見物で沈默を守つて居つた樣である。此集會後間もなくヒルツェルに送つたロッツェの書翰に次の樣な意味のことが書いてある。此集會は自分に生理學の現狀に就て深い不快の感を殘した。伯林より來會した會員に若干の知己は出來たが、併し其等より何か意見を聞くでもなく又自分の意見を述べもしない。其れは又必要なことでもない、自分は今はすつかり滿足して氣に入つた花園の脇きに住つて居る、云々。玆に花園云々と言つて居るのは、元來ロッツェは住宅に對して非常に神經質で非常に面倒な注文を有つて居つた、其書信中には住宅に對する不平や、氣に入つた住宅が手に入つた喜びやか屢細かく陳べてある、又非常な筆無精を以て有名であつたに拘らず、其住宅の樣子、眺望とか、間取りの工合とかゞ極めて精細に記されてある、で丁度此頃ロッツェは大變氣に入つた花園を見おろす住宅が手に入つたのであつた。即ち前に述べた終りの句は、此心持ちのよい花園を見て自分はすつかり滿足な生活をして居る、何を苦しんで青筋を立てあつて淺薄な論爭などをする必要があるか、といふ樣な意味であらう。

此唯物論々爭は、双方共極めて粗笨な議論であつたが、併し其れが當時如何に一般社會の注意と關心とを引いたか、又は之と關聯した唯物論的著作が如何に一般公衆に歡迎されたか、といふことは、ヷグナーの「人間の創造及び靈魂の實體に就て」が出版後數週間の内に三千部忽ち賣切れ、ビュヒネルの「力と物質」が一八五五年より八十八年までの間に十六版を重ねたといふ様な事實を以てしても其一端を窺ふことが出來ると思ふ。

五

此唯物論が膽汁對肝臟の關係、即ち等しく空間内に起る物質現象相互の關係をば思想對腦髓、即ち意識作用と物質現象との關係に類推するは前にも言つた様に極めて生ぶな、粗笨な議論である。尙ほ又此一派は比較解剖學や生理學やの研究によつて、人、獸の間に本質的の差がない、其差違は畢竟量差に過ぎないといふことを理由として、物、心の類差を否定し、精神作用も畢竟物質作用若くば其結果に過ぎぬと說いて居る。例へばカール・フォークトが類人猿の解剖的研究に依て人獸の類差を否定し、而して之に基いて物心の類差を否定し、精神作用も畢竟物質作用の一形式に過ぎない

と說いたのは其一例である。これも亦前と同樣粗笨な論理であることは架說を要しない。のみならず、カントに依てコペルニクス的轉廻が仕遂げられた哲學思想から見れば此の如き唯物論は實に本末顚倒の見解である。此哲學思想に依れば、少くとも物質的自然は精神の種々の先天的原理に依てこしらへられた世界、構成せられた世界である。物質より精神を導出さんとするはこしらへられた物からしてこしらへる主を導出さんとするものである。但し唯物論は斯の如く見易き謬誤を含んでは居るが、併し其主張の破邪の面に於ては取るべき點がないではない。第一に其れはヴグネルの樣な單純な考で知と信との圈域を峻別して宗教的傳承に活路を與へんとする姑息な自然科學對宗教の妥協案に對する强烈なる反對である。第二に、物質的自然の機械的說明を犧牲にすることに依て目的論を說き心靈的原理を立てんとする舊式の哲學說及宗敎觀が第十九世紀中葉以後の自然科學的精神に矛盾するとして之を攻擊したことである。尙ほ此の如き舊式の哲學說及宗敎觀は單に自然科學的精神に戾るのみならず、カント哲學の精神にも背反する。何となればカント哲學によれば自然科學の對象としての自然界は因果の範疇が構成原理となつて出來上つて居るものであるから、其本性上機械的でなければならない。カント哲學

の復興が自ら標榜して起り有力な思潮となつたのは前に擧げた三つの重要思潮中の最後であるけれども、併しカント哲學の根本觀念は流石專門學者の頭腦には其以前に於ても深い根柢を有して居つたので、今述べた樣な唯物論の强點並に弱點は新カント派の出現に先つて早く一部學者の間に氣付かれて居つた。

其結果として現はれたものが、物質的自然は遺漏なく機械的に說明されねばならぬといふ自然科學者並に唯物論の要求を認むると共に、併し此物質界は終極の實在ではない、終極の實在は其根底に存ずる精神的のものである、機械的の物質作用は此精神的實在の現はれ、若くば其目的を實現する爲めの手段にすぎないと見るところの唯心論的形而上學であつた。 これが即ちロッツェの活動期に於て獨逸に於て有力であつた第二の思潮であつて、ロッツェ自身其主要な代表者の一人であり、之と同時期に於てはフェヒネル、アルベルト・ランゲ、稍後代に至つてはヴントなどが此中に含められ得ると思ふ。 ロッツェが最力を入れて機械的自然觀を唱道したのは其「一般病理學」、「一般生理學」、及び「醫學的心理學」を著はした時期である。 當時に於ては舊式の世界觀や人生觀を墨守して居る一般公衆の間に尙ほ徹底した機械觀が認められて居なかつたことは言ふまでもなく、專門學者に一般的な自然觀としても矢張り徹底した機械

觀ではなく、尚ほシェリングの「自然哲學」の影響を受けて、自然界は段階に應じて其根柢に働く力と法則とを異にして居る、單に理化學的の力と法則とのみに支配せらるゝは唯無機界のみであつて、有機界は其外に「生活力」といふ一種特別の力が働いて居つて之に依て動かされて居るといふ思想が專ら行はれて居つた。ロッツェは斷然此思想を排斥して徹底した機械的自然觀を說き、生命現象と雖も徹頭徹尾機械的に說明されねばならぬといふことを主張した。而して其說き方は自然科學的唯物論者等の其れに比して遙かに精緻で巧妙であつたので、當時唯物論々爭の最中にあつた唯物論者は之に非常に有力な勢援を得たと考へて盛に之を歡迎したのであつた。併し彼は間もなく公にした「ミクロコスムス」の初卷に於て明快に世界觀としての唯物論を排して唯心論を說き、物質界は徹底して機械的に說明されねばならないが、併し終局の萬在は精神的であつて、自然界の機械作用は萬有の眞の目的たる善、又は價値を實現する爲めの手段に過ぎぬと主張して、唯物論者の褒きの喜びを一場の糠喜びに了らしめた。無論ロッツェの哲學的處女作たる「形而上學」及び「論理學」には既に此の如き唯心論的思想―或は更に精密に言へば萬有は善若くは價値の實現の爲めに存ずるといふ倫理的又は目的論的唯心論―が明かに現はれて居るのであつて、ロッツェの

思想に對して此の如き誤解を起す筈はないのであるが、斯の如き誤解がたとへ一時でも眞面目に信ぜられたといふとに依て見ても、如何に此二つの著述―純粹な哲學的著作―が當時世に輕視せられて居たかといふことを察することが出來ると思ふ。總してロッツェの著述中に於ても「一般病理學」や「醫學的心理學」といふ樣な自然科學的なものは初版後間もなく再版が出たり和蘭語や佛蘭西語に譯されたりして相應に世に歡迎されて居るが、最初期の純哲學的のものは永い間世に認められて居ない。其れが認めらるゝ樣になつたのは、次に出でた「ミクロコスムス」といふ通俗向きに書かれた著述が廣く讀書社會に歡迎されてからのとである。是等の事實をばロッツェの聽講者の數に就て前に述べたこと―純哲學的の講義と心理學の講義との比較―と結付くれば、當時の思想の一般傾向を更に明かに想像することが出來ると思ふ。

兎に角ロッツェは斯の如くして舊式の自然觀に滿足することの出來ない自然科學の要求と、自然科學者間に專ら行はれた唯物論に滿足することの出來ない宗教的及道德的要求とをば併せて滿足させやうとしたのであつて、ロッツェの世界觀が前世紀七十年代以後に暫く勢力を得たのは此根本特徴が重要な原因となつて居ると思ふ。

六

ロッツェの時代に於ける有力な哲學思潮の第三は新カント運動である。此運動の端を開いたのはクーノー、フィッシャーのカント研究や、ツェラーの「認識論の意義及び問題に就て」Über Bedeutung und Aufgabe der Erkenntnistheorie, 1862に於て「カントに歸れ」の叫びを揚げたことや、アルベルト・ランゲが其「唯物論史」に於てカントの立場よりして唯物論を論評したことや、ヘルムホルツが其「生理的光學」(Handbuch der Physiologischen Optik)、「音感論」Die Lehre von den Tonempfindungen) 等に於てカントの先天論が其生理學の研究と一致することを證明せんとしたことやにあるとされて居る。是等の著述は丁度ロッツェの「ミクロコスムス」の著作最中から其完成後二年の間に出でた者であるが、併し是等の著述の意義は主としてカント研究に刺激を與へたといふ點にあつて、カント說を發展したり、精錬したり、純化したりしたのではない。併し段々と進むに從つて新カント運動はこんな方向を取つて行く樣になつた。即ちカントの純化發展(ワイダービルドウング)といふ方向に進んで行つて、ずつと後にギンデルバントが其「プレルーディエン」の序で言つた「カントを理解するとはカントを超越するの謂である」Kant verstehen, heisst über Kant

hinausgehen といふ様な精神でカントを研究し、發展して行く様になつたのであるが、ロッツェ生時中に斯る方向に進んだものは極めて少い。幾分なりとも斯る方向を取つて進んだ目星い作物を擧ぐればヘルマン・コーエンの「カントの經驗理說」Kants Theorie der Erfahrung(一八七一、即ちロッツェが「體系」論述の目論見を立てたといふ年)、アロイス・リールの「哲學的批判論」Der philosophische Kriticismus(第一卷、一八七六、第二卷第一部一八七九、)等であつて、ロッツェの死んでから後に此の如き方向を取つたカント運動は次第に發表して、其中よりして、現代の哲學運動の重要な中心となつて居るマールブルヒ派やバーデン派などの様なものが出でたのである。

此マールブルヒ及びバーデン兩派に共通な重要特徴は知らるゝ様に其の所謂論理主義にあるとされて居るのであるが、吾々が注意しなければならぬことは此論理主義の根本思想が新カント派に先つて既にロッツェの哲學に明かに現はれて居ることである。其れは即ち「ミクロコスムス」に於て既に現はれ「論理學」に至て更に明確な形を取て居る「妥當」Gelten の概念と其實踐哲學に關する種々の著書や論文に現はれて居る「價値自體」Wert an sich の概念である。尙ほ詳しく言へば、思惟に於ける心理的の作用と其內容又は對象とを離して視て、思惟の心理的作用を離れて超心理的 sach-

lich の「妥當」又は眞理自體の世界を認め、又之と並行して感情に於ける心理的の作用と其內容又は對象とを離して考へて、主觀的の心理作用を離れて絕對價値又は價値自體の世界を認めたことである。詰り、時間的の出來事といふ形を取るところの心理作用を離れて永遠の價値を有する眞善美がある、其れを吾々の精神に實現するのが認識、道德、藝術、宗敎の本領であるとする思想である。

無論此の如き思想は決してロッツェの新發見ではない。吾々に知られて居る範圍に於ては、此思想は古代に於てはプラトーンの「イデア」論に端を開いて居る。プラトーンの「イデア」論が如何なる程度まで今日の論理主義の方向に向つて精錬された形を取つて居つたかは、歷史家の間に色々異論のあることであるが、併し少くとも、プラトーンの「イデア」界の觀念は永遠的眞理、永遠的價値の超心理性に對する驚異の產物であるといふことは言はれ得ると思ふ。唯此「イデア」界をばプラトーンが形而上學的に見たか、純論理的に見たか(ロッツェは之を論理的に見たといふ最有力な主張者であるが)が疑問である。中世に於ては此思想は唯名論に對する實念論といふ形を取つて存し、近世に入つてはロックやヒューム等の心理學的の認識論や倫理說に對するカントの批判哲學の中心特徵となつて現はれて居る。然るにカント後に於ては其れ

はロマンティック期の形而上學的の考へ方や、之に次で勢力を逞ふした自然科學的の考へ方—其れが論理學や倫理學の研究に適用さるれば心現學的方法—の爲めに暫く堙滅して居つた、少くとも明確に說かれ主張されて居ない。殊にロッツェの當時に於ては論理學や倫理學やに於ける眞理や價値の研究が唯心理學的方法に賴つた結果として、自然主義—論理上の相討論や倫理學上の快樂主義—が有力な思潮となつて居つた。此際に當てカントの「先天的」の概念を復活し精錬して眞理や價値の問題が心理學的起原の問題と全然別であるといふことを力說して今日の論理派の先驅となり新理想主義の基礎を置いたのはロッツェである。（ロッツェの「妥當」及び「價値自體」の思想に就ては單行本「ロッツェ」中の拙論に簡單な敍說がある。尙ほ「妥當」に就ては本號に錦田文學士の更に精到なる研究がある。）

前に述べた樣にロッツェは一方に於ては自然科學的思潮と理想主義の要求との妥協に基いた形而上學を說いて居つて、自然科學的思潮が勢力を得て居つた前世期後半に彼れが比較的觀迎されたのは之に依ると思はれるのであるが、彼れの哲學が現代思想に對して重大な意義を有する點は、哲學中に於て少くとも最重要な問題である眞理や價値の問題の研究をば全然自然科學から獨立させやうとしたことに密接

に結付いた「妥當」とか「價値自體」といふ樣な概念であると思ふ。但しロッツェ自身は自己の哲學の此兩面中孰れに重きを置いて居つたかと言へば、其れは寧ろ形而上學であつた樣である。先づ、彼れの哲學上の處女作は「形而上學」であつた。其「體系」中彼れ自身が最重視して居たのも「形而上學」であつて哲學の中心問題は形而上學であるといふことを彼れは處々に明言して居る。而して前世期末に至るまでのロッツェの遵奉者若くば尊重者も亦主として其形而上學や宗教哲學に重きを置いて居る。例へばマックス・エンッチェルとか、嘗て（一八八七―九二）吾東京大學の哲學の講師であつたブッセとかは前世紀末期に於て自他共にロッツェ派を以て許した最顯著な思想家であるが、是等は何れかと言へば其形而上學及び宗教哲學の面に重きを置いて居る。吾邦によく知られて居る米國のラッドも亦たロッツェの影響を強く受けた哲學者であつて、ロッツェの講義綱要をば一部分は自ら譯し、他の部分は自己の監督の下に其同志や學徒に譯させて居るのであるが、其中「論理學」の譯をば最後に公にして、其序文に、ロッツェの論理學上に於ける寄與は他の部分（主として其前に譯された形而上學、宗教哲學、及び實踐哲學等を指さすと解せられねばならぬ）の其れの樣に顯著で有價値でないと記して居る（但し論理學上思惟の作用と內容とを峻別した點にロッツェの主要な功績を認め

て居るが)。

七

全體、前世紀後半に於ける前に擧げた三派の發展の逕路を追隨して見れば、其れは何れも自然科學からの漸次的解放であると言へると思ふ。第一の唯物論的思潮は本來自然科學的思潮に根柢を有して成立つて居るのであるから、其者の性質上全然自然科學から解放さるゝといふことは不可能である筈である。併し此思潮の最後の發展と見らるべきヘッケルの所謂「一元論」に就て見れば、其以前にカール・フォーグトやビュヒネルやに存じて居つた純自然科學的な、全然詩的、倫理的、宗教的要求を無視して居つた露骨な唯物論が、其處には詩化され汎神論化されて現はれて居り、それ丈け自然科學から解放されて居ると言へると思ふ。

次に第二の形而上學派に就て見れば、先づ第一に其代表者たるフェヒネル、ロッツェ、ヴントは共に初めは自然科學の研究から踏み出して居る。フェヒネルは知らるゝやうに初めは物理學を修め、物理學の教授であつて、中途眼病の爲め物理學的實驗に堪えず、方向を轉じて心理學及び哲學を研究するに至つた人である。ロッツェは醫學を修

め、私講師としても醫學を講じたが、自己の趣味よりして次第に哲學に轉じた。ヴントまた初めは醫學を修め、私講師としては最初は生理學を講じたが、次第に心理學者及び哲學者として立つ様になつた。ハルトマンも亦何れかと言へば此形而上學派に屬すべきものであつて、其出身が自然科學者でなくして軍人であり、機械的自然觀を排して「生活力」の概念を承認した點に於ては前の三思想家とは異なつて居るが、併し其哲學は其主著「無意識の哲學」の標題に添加して「歸納的自然科學的方法に從つての思辨的結果」spekulative Resultate nach induktiv-naturwissenschaftlicher Methode と標榜した様に、思辨哲學と歸納的自然科學との調和又は妥協である。然るに此形而上學派の最後の代表者と目せられ得べき現代のオイケンに至つて形而上學と自然科學との此妥協は全然破れて、哲學は全然自然科學から解放されたのである。

第三の思潮として擧げた新カント運動も亦同様の逕路を履んで進んで居る。第一に初期の新カント學者がカント説を辯護した仕方が言はゞ自然科學的であつた。即ち彼等はカントの先天説が生理學や心理學の研究に一致するといふことに基いてカント説を辯護したのである。ヘルムホルツやアルベルト・ランゲは其最好適例である。次に其カント哲學復興の中心目的が多くの場合に於て自然科學の基礎づけ

に在つた。アロリス・リール、初期のコーエンが其れである。然るに此運動が次第に發展し行くに連れて、カント說の見方は次第に論理主義的となり、而して其目的も亦自然科學の基礎づけ以外に(其れも一つの重要な仕事として殘つて居るが)倫理問題、美學問題、宗教問題等の論究に擴大して、コーエンの如き其體系として論理學、倫理學、美學、宗教哲學等に關する主著を公にし、キンデルバンド亦眞、善、美の三面に亘つての價値の研究を以て哲學の本領と見て、其各自に就て研究を試みるに至り、而して其方法は双方共に自然科學から全然解放さるゝに至つた。

斯くてロッツェ當時の三重要思潮は共に自然科學からの漸次的解放といふ方向を取つて進んで居るが、ロッツェは彼自身は形而上學派に屬し、而して其形而上學は自然科學と哲學との結合時期を適切に代表して居るが、併し他方に於ては其論理學及び實踐哲學に於ける眞理及價値問題に就ては、反形而上學的傾向を有する或は少くとも形而上學を中心問題とせずして認識論を中心とするカント派と一致し、而して其中に於ても自然科學から全然解放された最新の新カント派の先驅となつて居るのである。

八

今まで私はロッツェをば前世紀後半に於ける唯一の顯著な論理派の先驅である樣に述べて來たが、併し其外にロッツェとは稍後輩ではあるが併し同時代に屬する、現代論理派の先驅として擧げなければならない重要な思想家がある。其れは卽ちフランッ・ブレンタノーである。

現代の獨逸に於て論理派として擧げらるゝものに三派ある。其中の二つは自らカント派を標榜して居るものであつて、コーエン及びナトルプに依て代表さるゝマールブルヒ派、及びギンデルバント及びリッケルトに依て代表さるゝ西南獨逸派又はバーデン派であり、而して尚ほ一つはマイノング及びフッサールに依て代表さるゝブレンタノー派と呼ばるゝものである。而して現代論理派の先驅として並び擧げらるべき此ロッツェ及びブレンタノーの兩家は私交上非常に密接な關係に立つて居つた。ブレンタノーは歲から言へば一八三八年の生れでロッツェより二十一歲の後輩であり、其重要著述中の最初のものである「心理學」の第一卷が公にされたのはロッツェの「大論理學」と同年であつた。ブレンタノーが敎授及著述家として最活動したのは

ギーン大學に於てゞあつたが、彼れがヴュルツブルヒの哲學教授の椅子を失つた時に彼を窮地から救つてギーンの哲學教授の位置を得せしめたものはロッツェの推薦の力であつたといふことは、ブレータノーが一八七四年、卽ち丁度其のギーン轉任の年に此推薦に對して厚き謝意を表してロッツェに書き送つた書翰に依て知ることが出來る。此書翰はブレンタノーが丁度オーストリヤの文部省からしてギーン大學哲學教授任命の通知を受取つて直ちに書いたものであるが、之に依ればロッツェはブレンタノーをギーンの教授にする爲めに多年の間盡力して居たといふこと、而して之が爲めには一通りならぬ面倒な故障があつてロッツェの有力な援助によりて漸く之を排除することが出來たといふ樣なことが分る。而して之に依て又ロッツェが如何に學問上此後進を推重して居つたかといふことも察せられ得ると思ふ。而してブレンタノーは此一方ならぬ好意に對して大なる感激を以て厚き謝意を表し、墺國文部省よりの消息によれば彼の地の學海は非常な好感と期待とを以て自分を待つて居ることが分るが、これは全く貴下の好意ある推薦の賜である、といふ樣なことを書いて居る。私は年齢の相違はありながら或時期の間活動期を同じふして居る、而して現代論理學の先驅として並び擧げらるべき此兩家の間に思想の内容上如何なる

直接の關係があるかといふことは今は述べることは出來ない唯此私交上の關係を述べて思想の内容上の關係に就ては更に他日を待つことゝする。

* * * * * *

これが「ロッツェの時代」に就て私が述べやうと思つた全體である。ロッツェの哲學思想の内容に就ては明日公にさるべき單行本の諸論文に讓る。ロッツェは其書翰に依つて見ると極めて溫雅な、淡泊な、地味な純學究的な、高蹈的な性質の人であつた樣である。其講義振りなども、ファルケンベルヒの記すところによれば、少しも衒氣のない、極めて地味な、半ば座談的な、而かも流麗で極めて詩的趣味に富んだものであつたと言ふ。學者に通有な口の惡いといふ性質は多少あつた樣であるが、併し其書翰中に散見する惡口は極めて上品で、輕い、淡泊で、機智に富んだもので、少しも毒氣のない、寧ろ愛嬌に富んだものである。何でもない樣なことを如何にも大ぎやうに勿體ぶつて書く癖のある或哲學者が新たに著書を出すといふ噂をロッツェが聞いて書いた文句に、其新著も「亦た以前の著述同樣さぞ冗長で勿體ぶつたものであらう、そして多くの分り切つたことを一生懸命に新たに發明することであらう」viel Bekauntes mit grosser Mühe neu erfinden と言つて居る。私の講演に對しても亦たロッツェは恐らく地下で

同樣のことを言つて居ることゝ思ふ。